ホトトギス

六月号

ホトトギス
昭和二十四年三月二十六日運輸省特別扱承認雑誌第六二七号
平成三十年六月一日発行（第百二十一巻第六号）

風雅の小筥〔六〕

廣太郎

ヨリ少ブそこう離そ字つる外のてれ判句限
ンズなルれちにれれでのが国国森自りはら俳
がムくでぞら、てぞ表詩、語際羅国頂五ず句
日はすはれも漢しれ現の例に化万のけ・申は
本独るなの俳字ま長す中え当を象言る七し詩
語特なく言句はうくるでばて議を葉だ・上で
なでど、葉のそ。な、五英は論表でろ五げあ
ら、の二はよの漢っと・語めす現何うとる、
で日案・、う一字てい七のるるすと。いつ、
は本が三もに字はしう・よか俳るかこうもと
の語出・っ短一確ま実五うと句事しの定りい
魅のさ二とく字かい験にないシをてリ型でう
力言れシ短詠にに、が詠欧うン模こズのは事
の葉てラくむ読文俳なみ米事ポ索のムリあは
一のいブ、、み字句さ込のがジし俳にズる、
つ意るル例と方はのれむ言議ウて句多ムがこ
で味そにえいの十短た。葉論ムいのくの、れ
はだうすばう長七詩そ中でさでるリの文そま
なけでる韻意短文形う国はれはのズ海学ので
いであとも味や字文で語詩て、でム外で詩も、
だはるかそか、に学あのをいこあ、のあと、
ろなが、れら深なとる場詠るのると方るしそ
うく、漢まはいるいが合む現俳。いが、てし
か、や字で外意がう、は時場句何う魅とのて
。発はものれ味、意欧漢ににの年よ力い要こ
音りそ五てが日味米字踏参定かりをう素れ
、日れ・し含本合のをむ加型前こ感事はか
イ本ぞ七まま人い韻五としをまのじは、ら
ン語れ・うれでかで・いたどで短て何一も
トの文五。てもらは七う経のはさ、方つこ
ネ俳字のそい判は単・韻験よ、にそでにの
ー句数シのてるか語五をがう俳よれもは場
シのをラ後、よけが文一あに句っぞお俳に

句日記　汀子

平成二十九年六月三日　芦屋ホトトギス会

日帰りの出来ぬ旅路や明易し
山荘の火取虫には名残あり

六月四日　下萌句会

短夜や寝足らぬままに旅にあり
芦屋にもゆかりのありや業平忌
短夜や訃報伝へし受話器置く
空の色置きて始まる七変化
紫陽花の咲く山荘に名残あり

六月五日　ロイヤル俳壇

訃報あり更に短夜なりしこと
南天の花の白さに奢りなく
何気なくいつとなく明易きこと
我も恋ふ部屋の明るさ火取虫
一文を草し終へたる火取虫

六月八日　清交社

若竹の今年の力加はりぬ
神祀る緑蔭に斧許さざる
若竹の伸びる早さに時刻む
海近き暮らしの中へ岩燕
入りたるばかりに今日の梅雨の晴れ

六月九日　工業倶楽部

短夜や早立ちの旅重ね来て
雨蛙鳴かねば所在なかりけり
まだ雨を呼ばぬ蛙となりにけり

六月十三日　大阪倶楽部

蛍狩せし地へ組みし旅予定
やり残す仕事次々明易き
山越えてゆく旅路あり明易し
梅雨も又大地の恵みなりしこと
風薫る旅は週末てふ家居
空どこも梅雨らしくなき朝かな

六月十三日　綿業倶楽部

つまみては又つまみては苺かな
半分はケーキに残す苺かな
逆光の蜘蛛の囲何と美しき
その中に一寸すつぱい苺あり
又かかる蜘蛛の囲同じところかな

六月十七日　北近畿ホトトギス俳句大会前日句会

由良川の涼しき流れ荒れし日も
風涼し辿り着きたる高さかな
昨日今日あしたあさつて七変化

六月十八日　北近畿ホトトギス俳句大会

松蟬の森と気づきしよりの歩に

六月十九日　朝日カルチャー

梅雨晴の昨日の旅のつづきとも
席つなぐ会場汗の五十人
健脚であり しは昔緑蔭に

六月二十日　有恒俳句会

梅雨晴の木陰に憩ふ心あり
蜘蛛怖れぬては住めざる山の荘
ふと睡り誘はれてゆく涼しさよ
涼しさに馴れてはならぬ出先あり

六月二十日　無名会

驚きし蜘蛛の所在のはや失せて
見失ふ蜘蛛の早さでありしかな
六甲の紫陽花として山の色
又蜘蛛の囲にかかりたる迂闊さよ
大蜘蛛の早さに所在追ふことも

六月二十一日　夏潮句会

留守多き女主や黴の宿
空梅雨に雨乞ふ心ありにけり
ある如くなき如くあり網戸かな
梅雨荒れて列車不通と連絡来
又蕾つけはじめたる女王花
二階より見るをいざなふ合歓の花
夏至の日を余さず使ひきることに
到着し梅雨の心配なくなりし
残りたる人に涼しき句会かな

六月二十二日　句会と講演の会

夏至過ぎてふと淋しさに襲はるる
家居又楽しむ梅雨と思ひつつ
風いつも棲みて緑蔭なりしかな
上京や富士の雪解見つつ着く

六月二十三日　時雨句会

昼顔を咲かせて留守の多き家
祈ること多きや風の薫るとも
ふるさとの浜昼顔の咲く夕べ

六月二十九日　アネモネ句会

しなければならぬ宿題明易し
病む人に心重ねて明易き
拭き上げし玻璃戸に当る火取虫
入口も出口も失せて火取虫
時流れゆく早さあり短き夜
短夜のケーキと紅茶配らるる

六月三十日　きさらぎ会

東京の梅雨の銀座の四丁目
紫蘭咲く頃に又旅組まれたる
病む人にせめて梅雨明け待たるる日
消息の如く梅雨明け待たれたる
降られたる紫蘭に今日も雨となる

PDF= 俳誌の salon

廣太郎句帳

廣太郎

平成二十九年六月一日　蕉心会

七変化そろそろ君の変る頃
雲の峰ビル街包み込む早さ
夜釣人待つ水嵩でありにけり
金魚とは詠まれるために育ちゆく
遊船の予行演習めく走り
追ひかけて追ひかけられて鳩暑し
箱庭を語る山崎さん囲み
雷と青空鬩ぎ合ふ頭上

六月二日　六甲会

菖蒲池玉泉館に泊まりし日
六甲の山荘如何に蟻地獄
蟻地獄にも濡れ色といふ瞳
蟻地獄乾き切つたる浮世かな
花菖蒲館は年尾の世界かな
太宰府に偲ぶ悌花菖蒲
新しき君の俳碑風薫る
花菖蒲円周率は五桁まで

六月三日　芦屋ホトトギス会

火蛾は見てゐる阪神の為体
明易や滞在三日句座五回
夏草の上転げゆく決勝打

六月四日　野分会芦屋例会

人間に失格は無し桜桃忌
オホーツク戦いてゐるやませかな
やませ吹く北半球といふ運命
胸に手を当ててやませを聴く夜更

六月四日　青嵐会芦屋例会

嘶いて勝馬といふ孤独かな
蜘蛛の囲に囚はれ花鳥諷詠詩
ダービーで人生変はる漢かな
蜘蛛の囲の星と存問する高さ
網かけて蜘蛛悪役に徹しゆく

六月五日　カトリック新聞選者吟

みよし野に出会重ねてイースター

六月八日　土筆会

竹落葉風新しくしてをりぬ
烏の子人怖れぬがゆゑの咎
結界をはみ出してゐる竹落葉
白き線点になりつつ皐月富士

六月十二日　朝日カルチャー若草句会

百合を手に初聖体の子等の列
梅天を縫うて忌の旅祝ぎの旅
蠖蛄潜る地球の裏を知り尽し
昼は土夜は灯を友に蠖蛄出づる
百合捧ぐ受胎告知の大天使
梅天を遠ざけてゐる都心かな

六月十三日　「ふらんす堂通信」出句

薫風に水尾磨かれてをりにけり
河川敷てふ万緑の一部分
招かざる雷神招く水面かな
夏草に羽音水音吸はれゆく
オルガンの音色変りて風薫る
表裏談義を今に皐月富士
紫はカメラ目線や花菖蒲
百幹を空に預けて竹落葉
シャッターの音に震へて花菖蒲
鷺の孤高に鯉の従ひぬ
青

六月十五日　北國文芸選者吟

北限の田圃やませに靡かざる

六月十五日　登高会

実梅落つ紀州これより農繁期
代掻いて田の神近くしてをりぬ
曇天を掻き回しつつ実梅落つ
子燕の下駅長の出勤す
親燕翻る時餌も揺れ
日の本の未来信じて代を掻く

六月十七、十八日　北近畿ホトトギス俳句大会

由良川の流れに乗りて鐘涼し
麦秋の距離を置きたる鷺孤高
バス過る宮本幸子邸涼し
松蟬に引つ張り出されたる日差

六月二十、二十一日　あうたう句会

薫風を繋ぎて丹波甲斐信濃
露涼しはしる寺苑を忍者走る
ダイエット決意せし人氷菓手に
夏至の海神が怒つてゐるやうな
天国に近き枝甘しさくらんぼ

六月二十二日　ホトトギス社句会

新しき白も加へて雪解富士
雪解富士眼下に置きて質疑へと
緑蔭に首都の喧騒及ばざる
緑蔭の果てに東京タワーの威

六月二十四日　青嵐会東京例会

蒼天と梅雨空鬩ぎ合ふ都心
猫沈め芝公園の草茂る
咲くものに青芝といふ褥かな
大都市の底の底なる万緑裡

六月二十四日　野分会東京例会

玉川の過去は語らず桜桃忌
やませ吹く北の大地を歪めつつ
やませ吹く通学の児の列狭め
恋人の寄り添ひ歩くやませかな

六月二十七日　若水句会

夏木立抜け夏木立抜け事務所
若竹の宿子規生れて百五十年
若竹の色を潜りて入る茶房
夏木立抜ければ白き天守かな
鰳の香を放ちSP音放ち
夏木立馬車国賓を乗せて発つ

六月二十八日　目黒学園句会

波音に浜昼顔は襞を解く
燕の子人の視線に守られて
河鹿鳴く一級河川狭めつつ
口開けてあけて子燕育ちゆく
河鹿鳴く時旋律となる瀬音

六月二十九日　友オランダ送別

和蘭を白南風に塗り替へる君

六月三十日　カトリック新聞選者吟

大手門より新樹の香攻め上る

PDF= 俳誌の salon

雑詠

廣太郎　選

加ふるに富士聳えゐて羽子日和　熱海　嶋田一歩
初富士や箱根は暮れること早し　同
土地人として初富士を見る二箇所　同
底冷やぶぶ漬け勧められ惑ふ　大津　石川多歌司
著ぶくれの立ち居笑うて笑はれて　同
行数の足らざる日あり日記果つ　同
紀州徳川家の庭の鴨の池　神戸　後藤比奈夫
広やかな池なりし初鴨四五羽　同
初鴨を淋しがらせることならじ　東京　今井肖子
ていねいに磨く立夏のビアグラス　同
御輿待つ静かな熱気交差点　同
明るさを空へ真昼の祭笛　長岡　安原葉
漱石を生き返らせし避寒の湯　同
名園を出し気配なし雪女　同
悴みて迫はるる如くその場辞す　福山　竹下陶子
冬ざれの野山の未来ありにけり　同
煩悩のまゝに老いたる年忘　同
逆縁の娘に母親に帰り花　同

立春の野に踏み入るる一歩あり　神戸　立村霜衣
海神と分け合ふ火の粉磯竈　同
文机に江戸の匂ひや鳴雪忌　同
一と桶に若水を汲み朝日汲み　龍ケ崎　今橋眞理子
起きて来ぬ一人起こして雑煮かな　同
朝の日に黒光りして雑煮椀　同
神風は追風なりし宝船　神戸　和田華凛
広重の富士はみ出せる絵双六　同
寒の水一花浮べて整ひぬ　同
これまでもこれからも主婦去年今年　袋井　湖東紀子
食卓の改りたる雑煮かな　同
送る若水桶に溢れしめ　同
嫁の来ぬ農家の土間を嫁が君　東京　大久保白村
薩摩より蝦夷より富士見初句会　同
京三寒浪速四温の旅の日々　同
白鳥といふ静けさの滑りゆく　神戸　藤井啓子
四回転ジャンプできさう春立ちぬ　同
スカイツリー写してよりの春の水　同
貫長の案内由由しき紅葉寺　同　千原叡子
半蔀を揚げたる紅葉明りかな　同
散紅葉表面張力見せて池　同
磯竈焔の照らす笑ひ声　同　涌羅由美
天空をあまねく統べる寒の月　同
ゆるびたる闇引き締める猫の恋　同

PDF= 俳誌の salon

雑詠句評（五月号より）

敦子・眞理子・肖子
むつみ・とほ歩・中正
保佳・静龍・憲明
葉・廣太郎

この家に一人となりし隙間風　香川　三宅久美子

大勢で暮らしていれば部屋も暖かで、また賑やかなもの。賑わいの去ったのちのどうも温まりにくい室内にいるのは自分ひとり。自分が動かなければ何も動かないはずの室内だが、風の流れを感じ音を感じる。寂しさもあるが、淡々と述べたことによって、隙間風の聞こえるいつも通りの暮らしへの安堵も感じるのである。（敦子）

今まで一緒に暮らしていた人が居なくなり、ついに独り暮しとなってしまった。色々な事情が考えられるが、それが愛する人との死別の場合は一層悲しみも深いだろう。その事情は述べられていないが、それまでは気にしていなかった隙間風を感じた。季題が淋しさや悲しさを物語っている。（廣太郎）

枯菊のなほも咲かんとする力　芦屋　黒川悦子

散ることによって、その花期が終りになる植物が多い中で、菊は秋から晩秋へと長く咲き、散ることもなく一様に枯色となって果ててゆく。その移ろいには、しみじみとした哀れがあるが、虚子の〈枯菊に尚色といふもの存す〉のように、色香を感じさせる見方もあり味わい深い。作者は、そんな枯菊になお残る力を見出したのである。生命力に焦点を絞り、枯菊の力強さが捉えられている。（眞理子）

秋の代表的な花の一つである菊は、どちらかというと、少し悲しいイメージがあるのかも知れない。海外でも葬儀の時に用いられる事が多いと聞いたが、枯菊になると一層その終の姿を哀れに連想してしまう。しかしこの句は反対にその生命力に着目して見事に極楽の文学にまで昇華させている。（廣太郎）

初富士や富士もう見えぬ富士見町　神戸　藤井啓子

富士見町の名は東京にも多く残っており、ここも昔は富士山がよく見えたのだろうな、と思いながら通り過ぎることがよくある。かと思えば、住宅街の名もない坂ながら晴れた日には富士山がくっきり見える場所もあり、富士という山の大きさをあらためて思う。初富士は元日の富士である。掲句は、初富士そのものを言わずに、昔からさまざまな場所で初富士を仰ぎ見てきた多くの

人々の姿を通して、作者が感じたその美しさ、神々しさを読み手に伝えている。短い一句の中に三回登場する「富士」も、リズミカルで心地よい。（肖子）

関東、特に東京都内には現在でも富士見町や富士見坂等の地名の名残が残っており、実際江戸時代には広重等の描いた江戸の町に描かれている通りの富士山が実際見え、現在でも冬にはビルの間から見える事がある。ただ、そんな江戸時代のような訳には行かない現実を季題を通してユニークに詠んでいる。（廣太郎）

小正月骨正月とものがたき　神戸　後藤比奈夫

元旦を大正月というのに対して十五日を「小正月」と言い、女正月、花正月とも言われている。餅花を飾るのもその一つであり、地方色豊かな民族行事が残っている。骨正月は新年の祝い納めでもあり、正月に食べた鰤などの残りの骨を粕汁等にして食べ尽くして一連の祝い事が終わる。後半の行事の季題とわずか五文字「ものがたき」の措辞の働きは大きく、作者の心の大らかさ、考えが見事にこの一語に集約されている。慎み深く律義に行事に携わっている暮しに作者の賛美の念は尽きず、白寿の比奈夫先生が大事にしておられる思いを垣間見せて戴いた。（むつみ）

実際律儀に守っている家の事を詠んでいるのか、それとも季題の上、又日本の習慣の律義さを詠んでいるのか、何れにせよ一年の中で正月は最も細かく行事が分けられている時期の一つであろう。何か「ものがたき」の捉え方によっては、ポジティブにもネガティブにも解釈出来るところが面白い。（廣太郎）

寒鯉の水の色へと消えにけり　渋川　山本素竹

歳時記の解説にある様に、寒鯉は、じっと動かない。

掲句は、水の色を通して、寒鯉のゆったりと潜む様を、さらには、寒鯉の重量感すら感得させる名吟である。

鯉が消えていった水の色は鈍色、錆色の暗緑系であろうことや、その水の色と同色系の鱗に包まれた寒鯉の有りようが想像できる。

〈……の水の色へと消えにけり〉の単純明快な諷詠は、不要な文言は一切用いない！　諷詠の姿勢を示唆している。（とほ歩）

寒の間水温が下がると、他の魚もそうだが、特に鯉はじっと動かないで餌も捕食しない。又この間の鯉は美味であるという事で釣る人も多いそうだ。この句はそんなじっとしている鯉の緩慢な動きを捉えている。水底へとゆっくりと潜って行ったのか、その動作が寒々と重厚に伝わってくる。（廣太郎）

天地有情

沢子選

順三忌露けき月日重ねつつ　東京　稲畑廣太郎
忌心は白露を過ぎてより深し　同
春近し伊豆より望む富士と海　長岡　安原　葉
寒見舞にもお人柄にじむ文　同
これよりは赤子に戻り老の春　神戸　後藤比奈夫
無邪気にはなり切れぬもの老の春　同
暮れてから集る句会冬至なる　同　木村享史
数へ日を数へる指を折りにけり　同
その人の眼差凍てて瞬かず　熊本　今井千鶴子
東京の寒極まりしここ三日　同
人生を重ね着ぶくれ上手かな　神戸　和田華凛
いたはりの言の葉やさし冬ぬくし　同
寒凪や真珠筏をすべる波　同　山田閏子
昨日今日春待つ心ひとしほに　同
摩耶夫人の色彩豊か冬青空　同　大橋　晄
一の宮幸あれかしと七五三　同
老いらくの人恋ほしさの三ケ日　吹田　赤川誓城
小吹雪が雪のしづるを誘へる　同

些事一つづつひとつづつ日脚伸ぶ　福山　岩岡中正
注連縄の竜のごときに詣でけり　同
乾坤をなぎ倒したるはたたがみ　金沢　竹下陶子
キャンドルに出水の闇の深さかな　同
短日の金の朝月仰ぎ発つ　東京　千原叡子
顔見世へ盲し父と行きし日を　同
何となく一息つきぬ寒の雨　群馬　三村純也
病状を問はず語らず春寒し　同
年賀状会はぬ月日をつなぎけり　龍ケ崎　今橋眞理子
日脚伸ぶちよつと長居をしてしまひ　同
薫風を来て正面に鏡板　東京　今井肖子
紫を散り尽したる牡丹かな　同
茎漬や今日も一日終へて酒　熱海　浜崎素粒子
小さな木にも雪吊をぬかりなく　同
重ね来し虚子忌絵巻を繰る至福　香川　藤浦昭代
寿福寺の鶯しかと耳朶にあり　同
すぐ解く荷として届き野水仙　東京　嶋田一歩
その中に近道もでき野水仙　同

PDF= 俳誌の salon